

【旧約聖書日課】サムエル記上 16章1～13節

1主はサムエルに言われた。「いつまであなたは、サウルのことを嘆くのか。わたしは、イスラエルを治める王位から彼を退けた。角に油を満たして出かせなさい。あなたをベツレヘムのエッサイのもとに遣わそう。わたしはその息子たちの中に、王となるべき者を見いだした。」²サムエルは言った。「どうしてわたしが行けましょうか。サウルが聞けばわたしを殺すでしょう。」主は言われた。「若い雌牛を引いて行き、『主にいけにえをささげるために来ました』と言い、³いけにえをささげるときになったら、エッサイを招きなさい。なすべきことは、そのときわたしが告げる。あなたは、わたしがそれと告げる者に油を注ぎなさい。」⁴サムエルは主が命じられたとおりにした。彼がベツレヘムに着くと、町の長老は不安げに出迎えて、尋ねた。「おいでくださったのは、平和なことのためでしょうか。」⁵「平和なことです。主にいけにえをささげに来ました。身を清めて、いけにえの会食と一緒に来てください。」

サムエルはエッサイとその息子たちに身を清めさせ、いけにえの会食に彼らを招いた。⁶彼らがやって来ると、サムエルはエリアブに目を留め、彼こそ主の前に油を注がれる者だ、と思った。⁷しかし、主はサムエルに言われた。「容姿や背の高さに目を向けるな。わたしは彼を退ける。人間が見るようには見ない。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る。」⁸エッサイはアビナダブを呼び、サムエルの前を通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」⁹エッサイは次に、シャンマを通らせた。サムエルは言った。「この者をも主はお選びにならない。」¹⁰エッサイは七人の息子にサムエルの前を通らせたが、サムエルは彼に言った。「主はこれらの者をお選びにならない。」¹¹サムエルはエッサイに尋ねた。「あなたの息子はこれだけですか。」「末の子が残っていますが、今、羊の番をしています」とエッサイが答えると、サムエルは言った。「人をやって、彼を連れて来させてください。その子がここに来ないうちは、食卓には着きません。」¹²エッサイは人をやって、その子を連れて来させた。彼は血色が良く、目は美しく、姿も立派であった。主は言われた。「立って彼に油を注ぎなさい。これがその人だ。」¹³サムエルは油の入った角を取り出し、兄弟たちの中で彼に油を注いだ。その日以来、主の霊が激しくダビデに降るようになった。サムエルは立ってラマに帰った。

【使徒書日課】 テモテへの手紙一 1章12～17節

12わたしを強くしてくださった、わたしたちの主キリスト・イエスに感謝しています。この方が、わたしを忠実な者と見なして務めに就かせてくださったからです。13以前、わたしは神を冒瀆する者、迫害する者、暴力を振るう者でした。しかし、信じていないとき知らずに行ったことなので、憐れみを受けました。14そして、わたしたちの主の恵みが、キリスト・イエスによる信仰と愛と共に、あふれるほど与えられました。15「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」という言葉は真実であり、そのまま受け入れるに値します。わたしは、その罪人の中で最たる者です。16しかし、わたしが憐れみを受けたのは、キリスト・イエスがまずそのわたしに限りない忍耐をお示しになり、わたしがこの方を信じて永遠の命を得ようとしている人々の手本となるためでした。17永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

《終わり》は《始まり》【こども説教のために】

教会暦の一巡りの終わりを告げる日曜日、「終末主日」を迎えました。来週には、新しい一巡りの始まりを告げる「待降節(アドヴェント)」を迎えます。「待降節」には、礼拝堂聖壇や会堂各所の装いも、すっかり新しくいたします。一つのことが終わり、次の新しいことが始まるのです。教会の子どもたちとは、すでに「待降節」を迎えるための準備を始めてきました。

「暦」を用いて、わたしたちは、毎年同じ営みを重ねます。けれども、同じことを毎年繰り返しているだけ、なのではありません。同じ営みを重ねながら、そこで常に、一つのことが終わり、新しいことが始まることを確かめているのです。わたしたちの「命」の営みがそうであるように、です。

この日を「収穫感謝日」としても記念しています。特に秋の季節に豊かに与えられる大地の実りを神からの恵みとして感謝し、共に分かち合う喜びを確かめながら祝うときです。「大地の実り」は、一年あるいは一連の営みの終わりに与えられるものです。農作物や家畜であれば、一世代の終わりと言ってもよいでしょう。それは、また、次の世代の始まりです。「大地の実り」は、その年の収穫をして消費し尽くしてしまうわけではありません。次の「大地の実り」をもたらす営みの始まりが、そこにはあるのです。

人の人生も同様です。一人ひとりの人生の節目ごとに、「実り」を収穫するときがあります。人生の終わりもまた、最後の「実り」を収穫するときです。それらの「実り」は、続く「実り」をもたらすための始まりにもなります。一人の人の人生は、「実り」をもって終わります。そして、それは、別の人の人生の「実り」をもたらす始まりの「種子」にもなるのです。

「サウル」から「ダビデ」へ

旧約聖書日課（サムエル記上 16 章）の「ダビデの油注ぎ」の出来事は、その発端に「サウル王の終わり」の始まりがあったと、物語られています。

これは、主イエスの時代よりも千年ほど前の時代、イスラエル・ユダの人々の中に王が立てられるようになった「王国草創期」の物語です。初めに「サウル」というベニヤミン族の人がイスラエルの王となります。

その時代、イスラエルの人々の心の拠り所ともなっていた「シロの神殿」が、敵国ペリシテ軍によって破壊され、あろうことか「神の箱」が奪われるという大事件が起こっていました。幸いに「神の箱」は返還されていましたが、イスラエルの人々の安全・安心を脅かす敵国は、ペリシテ人だけでなく周囲に林立していたのです。今までは、戦争となれば、「士師」と呼ばれる指導者がその都度、選ばれて、イスラエルの人々を束ね、戦ってきたのです。しかし、人々は、安全・安心を確かなものとするため、周辺国のように強力な「王」を戴いた国づくりをすることを願いました。そこで、「神殿」に仕えていた宗教指導者、祭司であり預言者と見られていたサムエルが、人々の願いに応じて「王」を選び立てる役割を引き受けたのです。

最初に白羽の矢が立てられたのが、ベニヤミン族の「サウル」という青年でした。真っ直ぐな性格の「サウル」は、預言者サムエルに「油」を注がれるとすぐに、イスラエルの人々の間で「王」と認められ、人々を束ね、敵国に対処する指導者としての能力を発揮するようになります。ところが、ある出来事がきっかけとなり、サウル王は心を病み始めます。敵国アマレク軍との戦いで、勝利しても一切の戦利品を持ち帰ってはいけない、すべては神のものだとされるべきだから、と告げられていたにもかかわらず、部下への温情から、彼らが戦利品を持ち帰ることを許したのです。そのことを知った預言者サムエルは、サウル王を咎め、「神はサウルを王位から退けられた」と告げるようになったのです。そして、その代わりに新しく「王」とされる者があると、預言者サムエルが「油注ぎ」を強行したのが、「ダビデ」というユダ族の人エッサイの末息子でした。

「サウル」の時代から「ダビデ」の時代へ。その転換点を示す逸話だとも言えますが、実際には、そう単純な話ではありません。ここに登場する「ダビデ」は、まだ少年なのです。武器を持って戦ったこともない、親や兄たちに命じられて羊の群れの番をしながら豎琴を奏でているばかりの者です。彼がユダ族の「王」として立てられたのは三十歳になってから（サム下 5:4）、「油注ぎ」から、おそらく十数年後のことです。それまでは、なお「サウル」王の時代なのです。そして、この「サウル」の時代なくして「ダビデ」の時代が訪れることもなかったと、「サムエル記」は物語っていくのです。

「主に従う」

聖書朗読を省略しましたが、今日の福音書日課（マルコ 10 章）には、あるとき主イエスが旅支度をしているところに一人の人が走り寄って来て、「**永遠の命を受け継ぐには、何をすればよいでしょうか**」（マルコ 10:17）と尋ねたという逸話が物語られています。二か月前に「マタイ福音書」が伝える同じ逸話を、主日礼拝の福音書日課として聞いたばかりです。

この男は、実に真っ直ぐな人として描かれています。「永遠の命」を問われた主イエスは、端的に、神の律法として教えられていること、「**殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、奪い取るな、父母を敬え**」（同 10:19）といった掟を守って生きなさい、と告げられたのですが、彼は、「**そういうことはみな、子供のときから守ってきました**」（同 10:20）と答えることができました。それは、嘘偽りのないことだったのでしょう。だからこそ、主イエスは、その彼を見つめると、慈しんで言われたというのです、「**あなたに欠けたものが一つある。行って持っている物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい**」（同 10:21）。結局、その男は、この主イエスの言葉を聞いて、気を落とし、悲しみながら立ち去ったといえます。それは、たくさんの財産を持っていたからだ、福音書は説明するのです。

この男は、財産を持っていて、その財産に固執したから、主イエスに従うことができなかったのだと、考えるかもしれません。けれども、それは違うと思います。彼が財産を売り払うことができなかったのは、彼が真面目だったからです。その財産によって生きている家族や雇人が大勢いたのでしょう。彼らに対する責任を放棄するわけにはいかない、と真面目な人間ならば考えるのではないのでしょうか。

実のところ、主イエスは、そのように彼が考えることを分かっている、「持っている物を売り払って」と難しいことを求められたのかもしれませんが。主イエスは、真っ直ぐで真面目な彼のことを慈しまれたのです。「あなたが、いつか従ってくることを願っているし、待っているが、あなたのときは、今ではないのではないのか」と、主イエスはお考えになられたのです。

彼は、退けられました。しかし、その様子を見ていた弟子たちには、主に従う新たな決意が与えられました。ペトロは、「**わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました**」（同 10:28）と告白しています。その弟子たちを通して、あの男もいつか、弟子たちに加わって主の道に従い行く者として生き始めたのではないのでしょうか。そのときには、彼に弟子となるしるしとして「洗礼」と共に「油注ぎ」が為されたはずです。いいえ、すでに主イエスが、あのとき、彼に「油注ぎ」をしてくださっていたのです。